



『日本語-マラーティー語基本動詞用法辞典』作成プロジェクト : インドにおける日本語教育の基礎作りに向けて

パルデシ, プラシャント
桐生, 和幸

(Citation)

神戸大学留学生センター紀要, 13:87-102

(Issue Date)

2007-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/00523046>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00523046>



『日本語—マラーティー語基本動詞用法辞典』作成プロジェクト —インドにおける日本語教育の基礎作りに向けて—

パルデシ プラシャント (神戸大学)

桐生 和幸 (美作大学)

1. はじめに

インドでは本格的な日本語教育が始まってから50年近く経過しようとしているがインド人日本語学習者の誤用分析や日本語・インド諸語間の対照研究はほとんど行われてないといっても過言ではない。またインドにおける日本語教育現場では概ね文法翻訳法で教育が行われ、教材として主に英語母語話者を対象に作られた日本語教材がそのまま使われている。日本語とインド諸語の辞書も不足しているのが現状である。このように教育のインフラ整備が遅れている状況にもかかわらず、近年のIT産業による根強い需要で日本語学習者のみならず日本語能力試験の受験者も年々増加の一途を辿っている。

インドにおいて日本語教育が盛んである主な都市はデリー (北インド)、コルカタ (旧カルカッタ, 東インド)、チェンナイ (旧マドラス, 南インド) とブネー (旧プーナ, 西インド) である。図1で示したグラフはインドで日本語能力試験を受検する受験者のその推移を、4つの会場別に描いたもので、<http://www.jfindia.org.in/nihongo456/recruit/jlindia.html>より転載したものである。

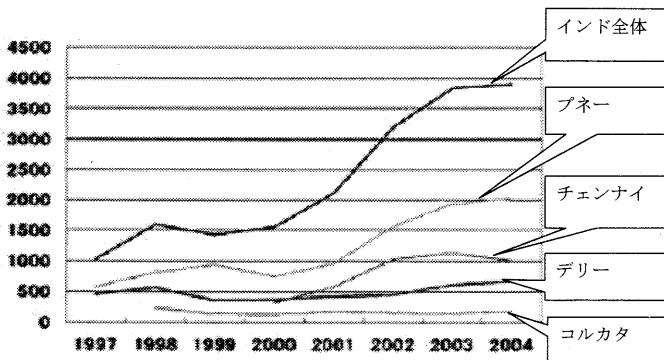


図1：インドの日本語の能力試験受験者数（1997年度～2004年度）

なお2005年度日本語能力試験の受験者数の実態は以下の図2のグラフで示したとおりである（受験者数のデータは<http://momo.jpf.go.jp/jlpt/j/not.html>によるもの）。

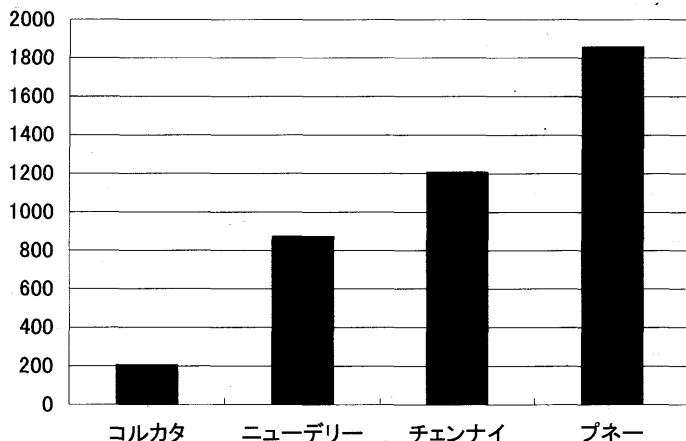


図2：インドの日本語の能力試験受験者数（2005年度）

図1および図2のグラフからわかるように第一報告者の母語であるマラーティー語を公用語とするプネー市（マハーラーシュトラ州，西インド）の日本語学習者の伸びが著しいことがうかがえる。なお，マハーラーシュトラ州中等教育委員会は2006年度より中等教育において外国語として日本語を導入することを正式に決定している。

上記の状況を踏まえて，インドの日本語教育現場に必要な日本語教材の開発が急務であることが推察される。本報告書で紹介する『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』作成プロジェクトはインドにおける日本語教育の基礎作りの一環であり，とりわけマラーティー語を母語とする人の日本語学習支援を目指すものである。この辞書の作成により，マラーティー語母語話者の日本語学習の充実を図ると共に，他のインド諸語話者の日本語学習にも参考となる資料を提示し，ひいては今後の日本語教育の向上と発展に寄与することが最大の目標である。

2. プロジェクト着手の経緯

前節で述べたようにインドにおける日本語教育には従来母語の特性を活かした教

材や教育法が重視されない嫌いがある。しかし、近年のIT産業による需要で日本語学習者が急増しつつある状況の下では、母語の特性を活かした教材や教育法の開発が急務となっている。国際交流基金が2003年に実施した海外日本語教育機関調査によると、インドの学習者数は5446人（世界で21番目）であった。過去に遡ると1970年485人、1990年1407人、1993年2161人、1998年3946人となっている。1993年からの10年間で約2.5倍の急激な増加となっている。しかしこれを対人口比で見ると、184000人に1人である。最も高い割合を示すのはオーストラリアで52人に1人、韓国もほぼ同じで53人に1人で、中国は3400人に1人であった。南アジアでは、ネパールが16530人に1人、スリランカで3830人に1人であるから、インドの学習者数は人口に対してまだまだ少ないと言える。その主な原因の一つは従来日本語教育が大学レベルで提供され、またインドでは外国語教育が主に英語を通じて行われているところにある。そのため英語で教育を受けてないあるいは英語が達者でない多くの人々は日本語教育の恩恵を享受することができなかった。また大学レベルで日本語教育が行われていたため英語母語話者のための日本語教材で事足りりとする傾向がある。それ故、それぞれの現地語の特徴を考慮に入れた日本語学習のための教材が開発されず、また日本語学習者向けの日本語・インド諸語辞典も殆ど編纂されることがなかった。

2005年4月29日に日・印首脳会談が行われ、共同声明と行動計画が発表された。インド側は中等教育で日本語を正式な選択科目として導入することを決め、日本側はインドにおいて5年間で3万人の日本語学習者を養成する目標を設けている。首相訪問による共同声明に日印の人的交流発展の鍵として日本語教育普及の支援が謳われたことで学習熱がさらに高まると予想される。しかし翻って現状に目を転じると、マハーラーシュトラ州ではマラーティー語を母語とする学習者向けにマラーティー語で書かれた教材がほとんどない。マハーラーシュトラ州中等教育委員会は2006年度より中等教育において外国語として日本語を導入することを正式に決定しているため、今後同州で初級レベルの学習者の数が増加することが予想されるが、母語による教材および日本語と母語間の辞書の不足は深刻な問題である。月謝が高いイングリシユミディウム(English Medium)の学校ではなく、現地語（マラーティー語）で勉強する学生が外国語学習をする際、英語の壁が常に立ちはだかる。経済的事情で英語教育を受けることのできない大多数の学生（地方居住者を含め）に日本語の門戸を開くことも必要である。

以上述べたことは第一報告者が自らの日本語学習経験を通じて体験し、『日本語

—マラーティー語基本動詞用法辞典』作成を模索してきた。その実現に向けて日本語と南アジア諸語の対照研究に長年携わっている研究者と相談をし、このプロジェクトを立ち上げることになった。プロジェクトの代表者はブラシャント・パルデシ（神戸大学、第一報告者）であり、分担者は桐生和幸（美作大学、第二報告者）、石田英明（大東文化大学）と小磯千尋（亜細亜大学非常勤）である。この4人によるグループ研究として2005年度第1回博報「ことばと文化・教育」研究助成を申請した。合計103件の内18件が採択され、その一つは我々の『日本語—マラーティー語基本動詞用法辞典』作成プロジェクトである。

プロジェクトメンバーの経歴を簡単にご紹介する。代表である第一報告者は、1994年に来日する前まではプネー大学外国語学科および財団法人海外技術者研修協会、ニューデリー支店付属日本語学校で日本語教育に携わっていた経験を通して対照研究の必要性を強く感じ、神戸大学で日本語とマラーティー語の対照研究を行ってきた。研究の対象は動詞範疇に纏わる現象—他動性とヴォイス—であり、研究の成果を日本語教育の現場に還元することを心がけてきた。第2の報告者である桐生は類型論的な観点から言語における普遍性と個別性の究明に従事しており、ネパールの先住民族の言語であるネワール語の『ネワール語基本動詞用例集』および『ネワール語文法』、『ネワール語語彙集』を出版している。研究分担者の石田氏は20数年にわたりマラーティー語とマラーティー文学の研究に従事しており、『基礎マラーティー語』と題した文法書、『マラーティー語実用会話』、マラーティー短編の翻訳本などを発表している。小磯氏は20年近くマラーティー語、マラーティー文学、インド哲学の研究を行っており、プネー大学から博士号を取得している。

上記のプロジェクトメンバーに加えて、言語学を専攻とする5人の大学院生に日本語版の見出し作成に関して協力を得ている。戸渡博史氏（東京外国語大学大学院）は言語類型論を専門とし、プネー大学外国語学科で3年間程マラーティー語母語話者に日本語を教えた経験を持っている。鈴木幸平氏、秋田喜美氏、大崎梓氏、竹村亜紀子氏（神戸大学大学院文化学研究科）は言語学を専攻とし認知意味論的な研究に従事している。本プロジェクトでは、以上の9名が今までの研究・経験で得られた知見と専門知識を活かして『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』の2007年3月の完成を目指して努力している。

3. 見出し候補の選定

本プロジェクトが基本動詞の用法に照準を合わせた主な理由は、動詞が文を作る上でその中核となるからである。動詞の様々な用法を体系的に習得する過程で自ずと文中に使われている様々な成分（語彙）やその成分と動詞間の関係を表す助詞の使い方なども同時に身につけることができるからである。換言すれば動詞を中心とした日本語習得は学習者にとって日本語でコミュニケーションをするために必要な文字・語彙と文法の両方を同時に学習できるものである。

本プロジェクトは2006年4月～2007年3月までの単年度のプロジェクトである。1年間という時間的な制限とインドにおける教育現場のニーズとのバランスを取る必要があり、プロジェクト着手直後にまず見出しの候補となる日本語の基本動詞の選定作業に入った。選定にあたって応用的な観点から以下の二つの基準を採用した。

- (1) インドにおける日本語教育現場で使用されている初級レベルの日本語の教科書の中で出て来るもの。
- (2) 国際交流基金主催の日本語能力試験の4級と3級レベルの語彙に含まれているもの。

この二つの基準の両方を満たしているものを見出し候補として選定することに決定した。(1)の実態を把握するべく『みんなの日本語』(全50課),『新日本語の基礎』(全50課),『日本語90日』(全30課)という3種類教科書を選び、レッスン毎の単位で動詞の一覧を作成した。この調査の狙いはどの動詞がどの順番で導入され、学習者がそれを習得していくのかということを把握することである。調査の結果、合計236語の動詞が使用されていることが判明し、またその導入の順番もほぼ同じであることがわかった。(2)の調査のためネットで提供されている日本語能力試験4級および3級レベルの語彙リストから動詞だけを抜き出した(<http://www.manythings.org/japanese/jlpt/>)。4級レベルは105語、3級レベルは152語、合計257語である。(1)の動詞リストおよび(2)の動詞リストは共通項が非常に多かったが片方にしかないものも50語ある。両方の基準を満たすすべての動詞を見出し候補にする方針であるので $257 + 50 = 307$ 語が候補として選定された。これらの動詞を自他別で分けた際、自動詞と他動詞のペアが揃っているものが多かった。揃っていないものに関しては追加をすることを決め最終的には350語の動詞が見出しの候補として決定した(見出し候補の動詞一覧は付録1を参照)。

4. 見出し作成およびレビューのプロセス

日本語の見出しを作成するにあたって主に大修館書店出版の『日本語基本動詞用法辞典』〔1989〕を参考にした。この参考書は外国人日本語学習者一般を想定している。我々が目指す辞典はマラーティー語を母語とする日本語学習者を想定しているのでその観点から見出しの中身の工夫をした。さらなる参考としては秀英出版の『動詞の意味・用法の記述的研究—43』〔1972〕、角川書店出版の『基礎日本語辞典』〔1989〕、大修館出版の『理想の国語辞典』〔1997〕、明治書院出版の『日本語基本語彙—文献解題と研究—116』〔2000〕、大修館出版の『日本語の多義動詞』〔2006〕などを参考にした。

見出しの具体的な内容として各動詞の様々な意味用法を基本的な用法から拡張的な用法、慣用句の順で提示し、各動詞がどのような助詞を取るのかを自然な文を使用し例示した。例文作成にあったって語彙力を増やすということを念頭におき工夫を凝らした。活用および自他の区別に加えて他の語彙との関連情報（類義語や反義語）をも盛り込んだ。さらに文法的な情報としてはボイス（受動文の直接と間接の有無）、アスペクト、モダリティーに関する解説を適宜加えた。マラーティー語の対訳をつける際、日本語とマラーティー語の類似や相違について解説を加え、特にマラーティー語を母語とする学習者が間違いやすいところを詳しく説明した。さらに辞書の中で使われているすべての漢字に振り仮名をつけることにした。教科書や教室で習ったことのない字が出てきても振り仮名がついているため新しい漢字の学習に繋がると思われる。

5. 編集作業

日本語の見出し作成は8人体制で行った。本辞書では、執筆者が複数ということ、また、すべての漢字に振り仮名を振るということから、編集作業においては、以下のような工夫をした。

まず、見出し語をエクセル上で各担当者が決まった書式（付録2）に基いて作成し、その後、作成者以外の二人の担当者が必要な情報の漏れを確認すると同時に、個人差を最小限に抑えるため見出しをレビューした。その後、ウェブ上にて細かい修正や意見交換ができるように共同執筆用アプリケーションであるウィキを利用し

で執筆者間で閲覧・修正できるようにした。

エクセルファイルを交換しあうことで校正作業を進めることもできるが、それでは同時にファイルの校正作業に掛かることができず、プロジェクトが1年という短い期間においては、効率よく校正作業を進めることができない。そこで、ウィキを利用することにしたのだが、ウィキ上では執筆者はエクセルで作成したデータ構造に準拠したデータ形式で閲覧・編集ができるようになっている。振り仮名に関しては、ウィキ上ではサポートされていないのと、その後のデータ処理のために漢字と振り仮名とをリニアなマークアップで情報の保持を行った（Wikiの画面は付録3参照）。

ウィキの利点は、同時に同じデータベース上のデータを分散して編集することができ、かつ、編集後別の人が即座にその内容を確認し、必要があれば再修正が可能であることにある。また、編集されたデータは、すべて時系列的にバックアップされるので、必要があれば、古いデータを時系列的に遡及し復元することが出来る点である。これにより、うっかりデータを消去してしまった場合でも復元できる。さらに数世代前のデータの参照や復元も可能となっている。

もう一つ利点を挙げるとすると、編集中のデータに対しての意見交換が関連する見出しのページにて行うことができるという点にある。メーリングリストで意見交換した場合、過去の意見を検索参照する手間がかかるという欠点があるが、ウィキでは項目ごとにコメントをつけることができるため、つけられた過去のコメントをメールのようにいちいち探す必要がない。まさに、共同執筆ソフトウェアならではの機能であるといえる。

本辞書ではマラーティー語の部分は当然デーヴァナーガリー文字を利用するため、Unicodeを扱えなければならない。また、最終的な組版ソフトとしてLaTeXにデーヴァナーガリーを扱えるItransパッケージを利用したので、テキスト形式でItrans方式のローマ字転写をデータとして保持しておく必要があった。

Itrans方式のローマ字転写とそれに対応するUnicodeのデーヴァナーガリー文字は常に同じ内容でなければならない、別々に入力すると不一致になる可能性がある。そこで、Itrans方式のローマ字入力でUnicodeのデーヴァナーガリー文字も同時に出力できるItranslator2003 というフリーウェアを入力に利用した。入力したローマ字転写データとデーヴァナーガリー文字データはそれぞれ対応するエクセルのフィールドに貼り付けるといった手法をとった（付録2参照）。

さらに、ウィキは、ウィキデータから簡単にXMLやLaTeX の形式に変換できる

必要があるため、Unicodeを扱え、且つ、テキストファイル形式でデータを保存することのできる Dokuwiki を利用している。これに基づいて、最終的にはPerlスクリプトにより、ウィキ形式のデータをXMLの階層構造データ（付録4）とLaTeX形式のソースファイルに変換している。XMLデータはXSLで規定された書式に従い、msxslプログラムによってXHTMLに整形された文書（付録5）へ変換し、インドの協力者がウェブ上で参照できるようにした。また、最終出版物は、このLaTeXソースファイルを用いて分割された全データを統合して、一冊の出版物として組版する予定でいる（付録6参照）。

振り仮名については、エクセルで入力した場合、振り仮名情報を保持しているので、該当する部分の振り仮名を表示した状態で保存し、その後、一旦html形式で保存する。このhtmlファイルをPerlで作成した処理プログラムでウィキ形式のテキストファイルに変換し、ウェブサーバーにアップロードする、という手順を踏んでいる。すべての漢字に対して振り仮名を手入力で付与するのは大変な作業であるため、エクセルの振り仮名機能を最大限に利用した。

6. 期待される効果

インドにおける日本語教育は数十年の歴史があるとは言え、まだ様々な意味において幼い段階にある。言語学や日本語学の専門的なバックグラウンドを持つ教師はほとんどいないといっても過言ではない。日本語とインド諸語の対照研究の少なさはこの事実を物語っている。現場の教師および学習者の双方に日本語・インド諸語間の類似点や相違点を客観的および体系的に説明する必要がある。

当辞典は自然且つ豊富な例文を通じて個々の動詞の意味ネットワーク（基本的・中心的な意味から拡張的・周辺の意味への拡張）の体系的な説明、その文法的な特徴（項の数、格枠組み、主語にたつ名詞の人称制限、アスペクト、ボイスなど）、他の語彙との関連（類義語、反義語、対応する自動詞・他動詞、敬語）、さらに分析的に捉えきれないその動詞に基づく慣用句などといった総合的な情報を提供している。言い換えれば当辞典は語彙（lexicon）と文法（syntax）の両方をセットとして提供する語彙・文法辞典である。このような資料は日本語学習者の日本語能力試験対策の強い味方となることが期待される。また日本語の学習過程において両言語間の類似点や相違点を発見することによって言語の仕組みの理解のみならず言語の面白さの理解に通じると思われる。

インドでは経済的な理由などから教科書、辞書、能力試験対策参考書などといった用途別の教材・学習資料を購入することが困難である。当辞典一冊で日本語の語彙獲得（例文の中で出てくる様々な名詞、形容詞、副詞、言い回しなど）、関連する他の語彙と関係（類義語、反義語、同音異義語、自他関係）、漢字の読み方の練習、文法（格助詞、受動形の使用上の説明）、母語との類似点や相違点の体系的な説明などといった様々なものが同時に習得できるいわゆるマルチ機能を兼ね備えた道具であり、インドのような教材が不足している日本語教育現場においては欠かせない存在になると思われる。

前述の通りインドでは今まで外国語教育は主に英語を通じて行われてきた。そのため外国語教育は月謝が高いイングリシュミディアム（English Medium）の学校に通う学生の特権のような風潮がある。また、現地語（マラーティー語）で勉強する学生が外国語学習をする際、英語の壁が常に立ちはだかり、外国語の勉強を敬遠する傾向がある。本プロジェクトの成果物である『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』は経済的事情で英語教育を受けることのできない大多数の学生（地方居住者を含め）に日本語の門戸を開くものであり、インドにおける日本語教育のさらなる発展に大きく貢献することが期待される。

インドは多言語国家でありインド全国に日本語教育の普及させるため日本語とインドの諸語の辞書編纂が必要である。『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』はそのさきがけであり、日本語と他のインド諸語間の辞書編纂に大きく貢献できるものである。日本語のデータを共有することによってインド諸語のみならず他の世界の言語と日本語間の辞書編纂に役に立てば幸いである。

7. 結びと展望

日本語と南アジア諸語の対照研究に長年携わってきた我々は、インドにおける日本語教育を支援することを目標に掲げ、研究チームを組み、『日本語・マラーティー語基本動詞用法辞典』を作成することにした。この試みで日本語とマラーティー語の間に英語を介入させることなく、直接結びつけることが可能となり効率のよい学習効果が期待できる。学習者にとって有益であるだけでなく、インド人の日本語教師にとっても有益なものとなることが期待される。1年間という短い期間の制限のなかで日本語能力試験の4級・3級といった初級レベルの350語に的を絞る作業を進めている最中である。この作業を途切れることなく中・上級の2級、1級の対

象語彙にまで拡大することが今後の展望である。

付録1

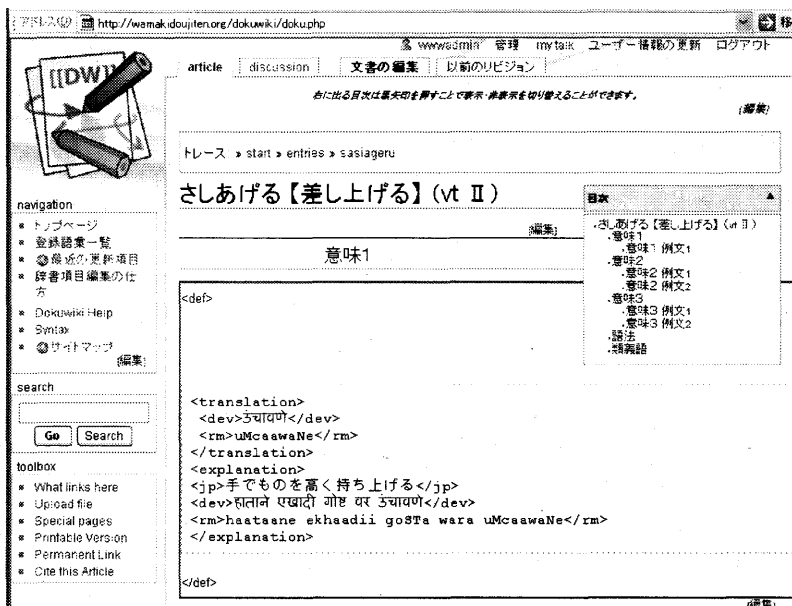
『日本語－マラーティー語基本動詞用法辞典』見出し候補									
1	会う	行く	置く	かかる	くれる	座る	出かける	満れる	ぶつかる
2	合う	いれめる	送る	着く	暮れる	着てる	できる	睡る	ぶつける
3	上る	急ぐ	遅れる	描く	消す	存じる	手伝う	眠る	太る
4	あきらめる	致す	起す	描く	答える	出る	出る	残る	探む
5	聞く	いたく	行く	隠れる	困る	確かめる	通る	残る	降る
6	空く	折る	起こる	かける	込む	出す	固く	載せる	減らす
7	開ける	いっしやる	怒る	重なる	壊す	助かる	固める	飲む	減る
8	あげる	居る	教える	重なる	壊す	助かる	飛ぶ	飲む	焼く
9	上げる	要る	押す	助かる	壊す	助かる	飛ぶ	飲む	焼く
10	預ける	入れる	恐れる	助かる	壊す	助かる	飛ぶ	飲む	焼く
11	預ける	祝う	教える	貸す	探す	訪ねる	止まる	乗る	参る
12	遊び	植える	落る	片付ける	咲く	立てる	取り替える	測る	負ける
13	遊ぶ	つかがう	おっしやる	勝つ	下げる	落とす	取る	重る	曲げる
14	温まる	要ける	動く	かぶる	さす	貰べる	取る	運ぶ	混ぜる
15	暖める	動く	蹴る	かむ	さす	貰べる	取る	運ぶ	混ぜる
16	温める	蹴る	蹴る	通う	さす	貰べる	取る	運ぶ	混ぜる
17	暖める	蹴る	蹴る	通う	さす	貰べる	取る	運ぶ	混ぜる
18	当てる	打つ	思い出す	乾く	騒ぐ	使う	鳴く	始める	待つ
19	扱う	移す	思う	乾く	騒ぐ	使う	鳴く	始める	待つ
20	集る	映す	泳ぐ	考える	しゃる	捕まえる	無くす	外す	学ぶ
21	集める	写す	下りる	かんばる	死ぬ	死ぬ	無くす	外す	学ぶ
22	あてはまる	映る	降りる	かんばる	死ぬ	死ぬ	無くす	外す	学ぶ
23	あてはめる	映る	降りる	かんばる	死ぬ	死ぬ	無くす	外す	学ぶ
24	当てる	写る	折れる	開く	開める	作る	習う	暗れる	見る
25	謝る	奪う	終る	開く	開める	作る	習う	暗れる	見る
26	謝る	生まれる	終る	開く	開める	作る	習う	暗れる	見る
27	洗う	埋める	飼う	決める	知る	知る	並べる	引く	見せる
28	争う	裏切る	買う	切る	知る	知る	並べる	引く	見せる
29	現す	売り切れる	返す	着る	知る	知る	並べる	引く	見せる
30	現れる	売る	返す	着る	知る	知る	並べる	引く	見せる
31	ある	売れる	換える	下る	知る	知る	並べる	引く	見せる
32	歩く	運ぶ	帰る	組み立てる	知る	知る	並べる	引く	見せる
33	合わせる	おいでになる	替える	替る	知る	知る	並べる	引く	見せる
34	言う	終える	代える	比べる	知る	知る	並べる	引く	見せる
35	生きる	起きる	変える	来る	知る	知る	並べる	引く	見せる

付録 2 : エクセルでのデータ

	A	B	C	D	E	F
1	#みだしひらがな	見出し漢字	レベル	自修 例文	メモ	←この行は、消さないでください。
52	さしあげる	差し上げる	Ⅱ	他		
53		意味1		手でものを高く持ち上げる		uMcaawaNe haataane ekhaadi xoSTa wara uMcaawaNe wakPRiutwaspartheeyaa vietyaane vietyasadaacaa saSheka khuaa varaanyMta uchaaMwaba
54				2 并議大会の優勝者は、優勝カップを高々と差し上げた。		
55		意味2				deNe deNe yaa arthaaciyaa 「やる」 kiMwaa 「与える」 yaa kriyaapadaaMcaa vinayashila mhaNaje ca hambala phaa crma kanSTha vyaktine warSTha vyaktiia kaahitari deNe asaa artha aah.
56				1 先生の誕生日にみんなでプレゼントを差し上げた。		saraaMcyaa waadhiwasaanimitta sarvaamNii miLuuna saraaMraa preheMta dia

	G	H	I	J	K
1					
52					
53	उचावणीहताने एखादी गोष्ट वर				
54	उचावणे वस्तुपरस्परच्या विजेत्याने विजेत्यापदाचा चक्क खुप वरपवत उचावला।				
55	देणेदेणे या अर्थच्या 「与える」 किया 「与える」 या क्रियापदाचा फिनयशील म्हणजेच हम्बल कोमी। कनिष्ठ व्यक्तिने वरिष्ठ व्यक्तिला काहीतरे देणे असा अर्थ आहे।			japaani bhaaSheta deNe yaa arthaaci tiina kriyaapada asheta kanSTha vyaktine warSTha vyaktiia deNe yaa arthii 「差し 上げる」 waaparataata waSTha vyaktine kanSTha vyaktiia detaanaa 「与える」 waaparataata itara itara koNthii vyaktine prathama puruSha mhaNaje vaktaa athavaa vaktyaacyaa jawaLacyaa saMtaadhaatila vyaktiia detaanaa 「与える」 he kriyaapada waaparataata 「与える」 saarake atyaMta wisteSha arthaace deNe yaa arthii waaparale jaaNaare kriyaapada jagaatila itara bhaaSheta aaDhaLata raahii paraMtu he kriyaapada dainaMina japaani bhaaSheta waaraMwaara waaparale jate	जपानी भाषेत देणे या अर्थची तीन क्रियापदे आहेत। कनिष्ठ व्यक्तीने वरिष्ठ व्यक्तिला देणे या अर्थी 「差し上げる」 वापरतात। वरिष्ठ व्यक्तीने कनिष्ठ व्यक्तिला देताना 「与える」 वापरतात। तर इतर कोणीही व्यक्तीने प्रथम पुरुष म्हणजे वस्तू अथवा वस्तूच्या जयकार्या संबंधातील व्यक्तिला देताना 「与える」 हे क्रियापद वापरतात। 「与 える」 साखे अत्यंत विशेष अर्थचे देणे या अर्थी वापरले जाणारे क्रियापद जगतील इतर भाषेत आढळत नाही। परंतु हे क्रियापद दैनंदिन जपानी भाषेत वापरत वापरले जाते।
56	सराच्या वादविषयानिमित्त तयारी मिळून सराना फेडर दिला				

付録3：Dokuwiki 上での表示



付録4：XML データ

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<data>
  <entry yomi="さしあげる" kanji="【差し上げる】" jita="vt" infl="II">
    <meaning order="1">
      <def>
        <translation>
          <dev>उचायणे</dev>
          <rm>uMcaawaNe</rm>
        </translation>
        <explanation>
          <jp>手でものを高く持ち上げる</jp>
          <dev>हाताने एखादी गोष्ट वर उचायणे</dev>
          <rm>haataane ekhaadii goStTa wara uMcaawaNe</rm>
        </explanation>
      </def>
    </meaning>
    <ex level="2">
      <jp>
        <![CDATA[ <ruby>弁論<rp>(</rp><rt>べんろん</rt><rp>)</rp></ruby><ruby>
          大会<rp>(</rp><rt>たいかい</rt><rp>)</rp></ruby>の<ruby>優勝者<rp>(</rp><rt>ゆうしょうしや</rt><rp>)</rp></ruby>
          वक्तृवर्षेच्या विजेत्याने विजेत्यापदाचा चषक घुप वरपर्यंत उचाविला।</dev>
          <rm>waktRRiutwaspardhecyaa vijetyaane vijetyaapadaacaa caShaka khupa
            varaparyaMta uchaaMwala.</rm>
        </ex>
      </jp>
    </ex>
  </entry>
</data>
```

付録 5 : HTML での表示

さしあげる 【差し上げる】

(vt), II

MEANINGS

(अर्थ 1)

《 उंचावणे 》

हाताने एखादी गोष्ट वर उंचावणे

EX べんろうたいかい ゆうしょうしや ゆうしやう たかたか さ あ
 井 論 大 会 の 優 勝 者 は、 優 勝 カ ッ プ を 高 々 と 差 し 上 げ た。

वक्तृत्वस्पर्धेच्या विजेत्याने विजेत्यापदाचा चषक खुप वरपर्यंत उंचावला।

(अर्थ 2)

《 देणे 》

देणे या अर्थाच्या「やる」किंवा「与える」या क्रियापदांचा विनयशील म्हणजेच हम्बल फॉर्म। कनिष्ठ व्यक्तीने वरिष्ठ व्यक्तीला काहीतरी देणे असा

Comment

जपानी भाषेत देणे या अर्थाची तीन क्रियापदे आहेत। कनिष्ठ व्यक्तीने वरिष्ठ व्यक्तीला देणे या अर्थी「差し上げる」वापरतात। वरिष्ठ व्यक्तीने कनिष्ठ व्यक्तीला देताना「やる」वापरतात। तर इतर कोणीही व्यक्तीने प्रथम पुरुष म्हणजे वक्ता अथवा वक्ताच्या जवळच्या संबंधातील व्यक्तीला

付録 6 : 印刷物のサンプル

सशिअगेरु [差し上げる] (vt): I

□ अर्थ १ « उंचावणे »

हाताने एखादी गोष्ट वर उंचावणे

- 全輪大会の優勝者は、優勝カップを高々と差し上げた。

वक्तृत्वस्पर्धेच्या विजेत्याने विजेत्यापदाचा चषक खूप वरपर्यंत उंचावला.

□ अर्थ २ « देणे »

हा देणे या अर्थाच्या 'यर' किंवा 'र' या क्रियापदाचा विनयशील म्हणजेच हम्बल फॉर्म. कनिष्ठ व्यक्तीने वरिष्ठ व्यक्तीला काहीतरी देणे असा अर्थ आहे.

जपानी भाषेत देणे या अर्थाची तीन क्रियापदे आहेत. कनिष्ठ व्यक्तीने वरिष्ठ व्यक्तीला देणे या अर्थी '差し上げる'. वापरतात. वरिष्ठ व्यक्तीने कनिष्ठ व्यक्तीला देताना 'やる' वापरतात. तर इतर कोणीही व्यक्तीने प्रथम पुरुष म्हणजे वक्ता अथवा वक्त्याच्या जवळच्या संबंधातील व्यक्तीला देताना 'くれる' हे क्रियापद वापरतात. 'くれる' सारखे अत्यंत विशेष अर्थाचे देणे या अर्थी वापरले जाणारे क्रियापद जगातील इतर भाषेत आढळत नाही. परंतु हे क्रियापद दैनंदिन जपानी भाषेत वाग्वार वापरले जाते.

- 先生の誕生日にみんなでプレゼントを差し上げた。 सरांच्या वाढदिवसानिमित्त सर्वांनी मिळून सरांना प्रेझेंट दिले.
- 社長にお歳暮を差し上げた。 कंपनीचा अध्यक्षाना वर्षाअखेरची भेटवस्तु दिली.

जपानमधे दरवर्षाचा शेवटी वर्षभर ज्या लोकांची मदत झाली त्या लोकांना फुल ना फुलाची पाकळी या भावनेने भेटवस्तू पाठविण्याची प्रथा आहे. त्याला 'お歳暮' असे म्हणतात.

□ अर्थ ३ « 'र' या वाक्यरचनेमधे दुसऱ्या कोणाला मदत अथवा फायदा दर्शक अशा अर्थाने संयुक्त क्रियापद म्हणून वापर. मराठीमधेही झाडून देणे या संयुक्त क्रियापदामधे देणे या क्रियापदाचा फायदादर्शक म्हणून वापर केला जातो.

- デパートでは場所を訪ねられた店員が、お客様を売り場へ案内して差し上げることになっている。

डिपार्टमेंटल स्टोअरमधे विक्रिस्थळाची चौकशी केल्या गेलेल्या कामगाराने ग्राहकाला योग्यटिकाणापर्यंत नेऊन दाखविण्याच ठरलेले आहे.

मराठी भाषेत दाखविणे हे क्रियापदही फायदादर्शक या अर्थाने वापरले जाते. उदा. नाचून दाखविणे, गाऊन दाखविणे, नक्कल करून दाखविणे इत्यादि.

- 英語がわからないお年寄りのために、英語の部分を日本語に訳して差し上げた。

इंग्रजी न समजणाऱ्या वृद्धमंडळींना इंग्रजीमधील भागाचे जपानी भाषेत भाषांतर करून दिले अथवा सांगितले.

USAGES

आदरार्थी भाषेमधील एक उपप्रकार असलेल्या विनयशील भाषेचा अविष्कार. संयुक्तक्रियापद वापरामधे मागील क्रियापदाचा 'र' फॉर्म वापरतात. वरिष्ठ व्यक्तीशी प्रत्यक्ष बोलताना वापरू शकत नाही. उदा. सरांशी बोलताना '先生に、このプレゼントを差し上げます。' असे म्हणू शकत नाही. या वाक्याने सरांवर बळजबरी किंवा जबरदस्ती केली जात आहे अस ध्वनित होत. त्यामुळे अशा प्रसंगी सक्तिचा अर्थ ध्वनित न करणारी '先生にもらっていただいた'

“Japanese-Marathi Basic Verb Dictionary” Compilation Project: A step toward the construction of the foundation of Japanese language education in India

Prashant PARDESHI and KIRYU Kazuyuki
Kobe University and Mimasaka University

Japanese language education in India boasts a history of around 50 years. Despite this, contrastive studies between Japanese and Indic languages, error analysis of Indian learners of Japanese, and development of teaching materials suitable for Indian students are still scarce. In order to remedy this situation, we launched a project for the compilation of a “Japanese-Marathi Basic Verb Dictionary” formed from a team of experts on Japanese and Marathi (a Indic language spoken in Maharashtra State of India). In this paper we report the process of the compilation of this dictionary and its implications for Japanese language education in Maharashtra in particular and that in the rest of India as well as across the globe in general. This project is funded by a research grant from the Hakuho Foundation and will be completed by March 2007.